







## 2025年度を迎えるにあたって

医療法人鉄蕉会 理事長 亀田隆明

2024年は世界を見渡しても、我が国を見ても、歴史の大きな転換点に差し掛かった年であったように感じます。世界各地で紛争が激化し、第二次世界大戦後の国際秩序をkarouじて維持してきた国連などの国際機関は、完全に機能不全を露呈し、世界がどこに向かってゆくのか世界中が見失っているように思えます。

一方国内では、30年間も続いたデフレ経済から、インフレターゲット\*を掲げ、池田内閣で用いられた所得倍増計画と似た政策が官製値上げのような形で実施され、円安効果と相まって一部の大手企業を中心に利益を押し上げ、税収も大きく伸ばしています。大手企業の賃上げ率も何十年かぶりに高率となっていますが、物価上昇率はそれを大きく上回っているように思えます。

このようなインフレの状況にあって、基幹病院の収入の90%以上を占める診療報酬は2年に一度の改定が行われました。混合診療禁止の前提で厚生労働省が示す診療報酬は公定価格と考えられますが、この制度は公共工事などと異なり物価連動となっておりません。現実に2024年度の改定では人件費充当分を含めて、0.8%の引き上げと発表されています。

政府のインフレターゲット率は年2%ですから、2年に一度の改定では少なくとも4%の引き上げが必要となります。政府の官僚の方や政策に係わる方達の多くは、30~40代の方達が中心で、この方たちはデフレ経済以外経験がなく、体感としてインフレでどのようなことが起こるか理解できていないのではないかと思います。

結果、2024年度中間決算では、大学病院を含む、ほぼすべての全国の基幹病院が赤字経営に追い込まれました。医療法人鉄蕉会は、総合病院が2024年も米国のNewsweek誌の世界ランキング45位、国内3位を維持し、過去最高の手術数、診療報酬と働き方改革への対応なども行いながら最大の努力をし、結果を出しながら、それでも赤字に陥っています。

補正予算で多少の補填などはあるかもしれませんが、経済成長を目指し現在の医療制度を守るのであれば、物価に連動した診療報酬制度にしなければ持続可能とはなり得ません。マイナンバーカードの上手な利用によって重複処方を無くしたり、AI技術を利用して合理化したりという病院側の努力も必要ですが、消費税の不公平税制など、制度上見直すべきことも多く、政府も真剣に制度改革に向き合っていただきたいものです。

では、2025年はどのような年になるのでしょうか。アメリカではトランプ政権が返り咲き、我が国は少数与党という弱い政権が舵を取るという、まことに先行き不透明です。しかし、どのような環境となっても、医療法人鉄蕉会は愚直に患者さま中心の医療、最高水準の医療を提供し続けることに変わりはありません。ただ、国内の制度だけに頼っては限度があることは事実なので、今一度世界に目を向け、国際医療にも本格的に取り組み、木更津プロジェクトの準備を行ってまいります。

\*：物価上昇率(インフレ率)に対して政府・中央銀行が一定の範囲の目標を定め、それに収まるように金融政策を行うこと

## 亀田メディカルセンターの理念

私たちは、全ての人々の幸福に貢献するために  
愛の心を持って常に最高水準の医療を提供し続けます

最も尊ぶこと：患者さまのためにすべてを優先して貢献すること

最も尊ぶ財産：職員全員と其の間をつなぐ信頼と尊敬

最も尊ぶ精神：固定観念にとらわれないチャレンジ精神



## 医療の質と効率化

亀田総合病院 病院長 亀田俊明

昨年は国際的な医療機能評価であるJCI (Joint Commission International)の更新審査もあり、職員一同医療の質を見直す良い機会に恵まれました。JCIやISOなどを継続するにあたり大切にしていることは、認証の取得が目的とならないようにすることです。つねに更新されていく医療界の常識において、本当に自分達の品質がアップデートされているのか。世界の最新の知見を学び、提供する医療の質を一層高めていく場として活用することが大切だと思っています。

質と同時に患者さま・医療者双方にとっての利便性や効率性も改善しなければならない問題です。色々なスタッフが何回も同じことを聞いたり、大量の書類や同意書の多さなど、運用を見直し、初診から外来・入院・退院・退院

後までの流れがよりスムーズにまわるよう今年大きく変えてゆこうと思っています。

近年、少子高齢化もあり人手不足がどこでも顕在化し人材確保が課題となっています。そんな中、当院は昨年看護補助者としてメンバーより9人の仲間を迎え入れることができました。その他にも院内ではベトナムや中国出身の方々も活躍しています。海外から日本に働きに来て技術を学ぼうとする彼らは、やる気や希望に満ちていてとても明るい雰囲気を作り出しています。

今年はいよいよ多くの海外のスタッフを受け入れたいと思いますし、鴨川がより多様性(Diversity)のある町となるお手伝いができればと思っています。

今年もどうぞよろしくお願い致します。



## 選ばれるための付加価値とは

亀田クリニック 院長 黒田浩司

新年を迎えるにあたり、スタッフの皆さんのこれまでの努力に改めて感謝いたします。

本来であれば2024年はコロナが明けて、以前のように活気ある毎日を過ごせることが期待されていた年でした。予測と違ってしたのは、物価高騰がコスト増につながって経営を圧迫した影響の方が大きく取りざたされてしまったことです。これは当院特有の問題ではなく、日本のすべての医療機関に当てはまる問題です。皆さんの努力の結果は、世界レベルの病院ランキングに現れているとおりですから、胸を張ってこれまで通り成長してゆくマインドを持ち続けましょう。

亀田クリニックもこれまで通り、医療DXをすすめてまいります。政府からマイナンバーカード利用促進のお知らせも届いていますから、アート・イン・ホスピタルを守りつつもクリニック1階のレイアウト変更を行い、受診者の利便性向上に努めます。DXを進める話は機会をいただくたびにしておりますが、気をつけていることはただ一つです。クリニックの現場でDXが進むと、来院者は「人恋しく」なります。「人の温かさ」はAIからは一番遠い存在です。このことを忘れないようにしましょう。

今年もよろしくお願い申し上げます。





## 新年のご挨拶

亀田リハビリテーション病院 院長 下地 尚

2024年を迎え、地域の皆さまにより質の高い医療を提供するため、今年も全職員が一丸となり努力してまいります。今年のテーマは「チームワーク」「人間力」「効率化」の融合です。DXの推進による効率化は重要ですが、それだけに頼るのではなく、私たちはチームワークと人間力を活かした医療を大切にしています。

昨年、当院は20周年を迎え、記念としてメジカルビュー社より『亀田式回復期リハビリテーション』という書籍を発刊いたしました。この取り組みは業界内外で高く評価され、昨年のISO外部審査でも、同業界への啓発活動としてgood pointの評価を得ました。これもひとえに皆さまのご支援のおかげと深く感謝申し上げます。

この節目を終え、新たに21年目のスタートを切るにあたり、これまでの成果を礎にさらなる成長を目指します。私たちが直面する現代は、ブーカ(VUCA: Volatility, Uncertainty, Complexity, Ambiguity)の時代です。自然災害や新型コロナウイルスのパンデミックなど、予測困難な出来事

が続く中で、医療現場にも柔軟で迅速な対応が求められています。このような不確実な状況に立ち向かうためには、各個人が持つ「人間力」と、職種を超えた「チームワーク」の力が欠かせません。

特に、医師、看護師、リハビリテーションのセラピスト、ソーシャルワーカー、栄養士、薬剤師、事務職員、PSA(Patient Support Assistant)が一堂に会し、顔を合わせながら意見を交わし、患者さま一人ひとりに最適なケアを提供することが不可欠です。各職種が連携し、互いに補完し合うことで、質の高い医療を実現します。

職員数が減少する中で、効率的な業務遂行が求められる一方、人間と人間のつながりが持つ力を最大限に活かすことが、私たちの医療の根幹です。DXの力を借りながらも、これらの職種が持つ専門性と人間力を結集し、混沌とした時代においても患者さまに寄り添う医療を提供してまいります。

21年目を迎える今年も、どうぞよろしくお願い申し上げます。



## 2025年のさらなる発展を目指して

亀田京橋クリニック 院長 岸本 誠司

亀田京橋クリニックは外来部門、ドック部門、リハビリ・運動部門から成り立っていますが、各部門においてより良質な医療と高度なサービスをより多くの方々に提供することを根幹の目標とし、様々な取り組みに挑戦して参る所存です。

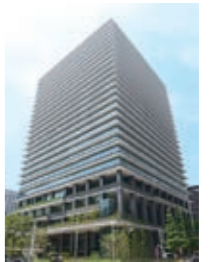
外来部門では、国内外の患者さまの多様なニーズに応えるため専門性の高い外来をより充実させ、さらに手術を含め高度な医療を提供するため本院とよりスムーズな連携が取れるようなシステム作りに取り組んでいます。

ドック部門では、ドック受診者にご自身の健康状態をより詳しく知っていただくための様々なオプション検査を開発してきました。初めは専門人間ドック受診者を対象にしていたことが大変好評なため、一般人間ドックさらに最

近急増しているインバウンドのドック受診者にも提供できるよう体制を整えています。

リハビリ・運動部門である亀田京橋スポーツ医科学センターは術後リハビリテーションが主体ですが、脚力チェックと運動指導や減量プログラムなど多彩な健康プログラムを開発し、さらに外へ向けての活動として東京スクエアガーデンや新宿高島屋などにおける健康増進イベントなども積極的に展開しています。今後は関心の高まっている健康経営に向けての企業アプローチにも取り組んで行く予定です。

2025年も「東京でも亀田クオリティ」を合言葉に各部門が取り組みます。今年もよろしくお願いいたします。



## 未来へつなぐ乙巳の誓い

亀田ファミリークリニック館山 院長 岡田 唯男

2025年は、干支の「乙巳(きのとみ)」にあたります。「乙」は成長する若木、「巳」は脱皮しながら成長するへびから、「復活と再生」を連想させ、不老長寿や強い生命力につながる縁起の良いシンボルであり、乙巳は「努力を重ね、物事を安定させていく」という意味合いを持つ年とされています。私たち亀田ファミリークリニック館山においても、この精神を胸に、新しい挑戦と未来への備えを進めてまいります。

当クリニックの建物は年月を重ね、老朽化が進行しています。患者さまに安全で快適な医療環境を提供し続けるため、適切な対策が急務です。医療技術や設備の充実はもちろん、地域に根ざした医療施設として、建て替えや移転を視

野に大きな決断が必要になると考えています。

また、亀田クリニックにて2000年に開始した家庭医育成プログラムは、本年度で25周年を迎えます。これまで多くの家庭医が育ち、地域医療の中核を担ってきました。変化し続ける社会の中で、プログラムの成果は地域医療の強靱な基盤を築く礎となっています。今後も地域の皆さまとともに医療の質向上を目指し、次世代の家庭医育成に尽力していく所存です。

乙巳の年を迎え、変化を恐れず、未来へと繋ぐ新たな一步を踏み出してまいります。今後ともご支援を賜りますよう、よろしくお願い申し上げます。



## 2025年に取り組むべき課題

亀田森の里病院 院長 高木 敦司

2024年度は、4月に本院から内科医の勤務と通年にわたる内科専攻医の派遣再開と、10月からは東海大学医学部附属病院からの整形外科医の追加派遣があり、診療体制が充実しました。さらに、定年となる麻酔科医の後任として、10月から亀田奈々先生が部長兼院長補佐として着任し、精力的に改革に着手され、手術体制の充実が図られました。

亀田森の里病院は、従来から地域包括システムの効率的運用を重視して、近隣の急性期病院、訪問診療クリニック、訪問看護及び居宅介護事業所との連携による入院診療の充実を図ってきました。森の里周辺は、厚木市の中でも高齢化率が高く、内科診療だけでなく、

整形外科を中心とした手術即応体制が充実されることにより、地域の患者さまのニーズに合った診療を提供できるものと考えています。健全な経営状態の回復のため、職員が一丸となって収支の改善にこれからも取り組んでいきたいと思ひます。

2025年度は、新たな診療体制の再構築による成果の年にしたいと思ひます。どうかよろしくお願いいたします。







## 新しいことを始めよう

亀田総合病院附属 幕張クリニック 院長 和田亮一

幕張事業部の中期経営計画(2023～2025年)のテーマを『わたしたちの形』としていますが今年度が最終年です。ドック・健診を主とする幕張事業部では2024年になって、ようやくコロナによる健診控えを脱したように思います。国立がんセンターにおいてもコロナ前の健診者数に戻ったと聞きます。

2025年度、様々な経費の増大によりドック基本料金のご負担を健保・受診者様に願うことにいたしました。これまで私たちのクリニックを受診された多くの方々の信頼に応えることがより一層求められることとなります。『初心に立ち返って、熱意と誠意を以って新たな時代を創ろう』を目標に掲げま

した。人間ドックの業務は多岐に亘ります。その一つひとつの工程(業務)を見直し、新たな体制と気持ちで受診者様をお迎えしたいと思います。

幕張事業部は開設して34年になります。今、変化に対応することが求められています。『新しいことを始めよう』。それがきっと新しい時代につながります。各部署、一人ひとりが先を見据え新しいことに取り組めるよう努めて参りますので、皆様のご理解とご協力をお願い申し上げます。中期計画の最終年度になりますが、目標に向かって邁進したいと思います。



## 未来を託す次世代に繋ぐ生殖医療の実現のために

亀田IVFクリニック幕張 院長 川井清考

日本国内においては生涯を通じた男女の健康を包括的に支援する体制が強化され、同時に意思決定の多様性を重んじてライフイベントと仕事を両立しやすい環境を整備していくことが重要かつ急務です。

当院では、開院当初より男女ともに治療できる不妊治療施設をコンセプトに診療をおこなってきました。将来、挙児(児をもつこと)を考えている男女にプレコンセプションケアを含め適切な情報提供を行ない、意識変容に繋げることを心がけています。

全ての患者さまの要望通り、児を授かっていただくことは難しいことはわかっていますが、自身が受ける医療に納得し前を向ける環

境を整えていきたいと考えています。

人生は一度きりです。また、自身では想像がつかない人生が待っていることは患者さまのみならずスタッフに関しても言えることです。必要とされ続ける医療環境を整備し、『亀田IVFクリニック幕張』は時代が変わっても価値を見出し続ける施設で在るよう成長していきたいと思っています。

医療は、いつの時代も質が高く均一に提供される時代ではなくなってきています。だからこそ、スタッフにも患者さまにも正当な医療として評価され得るよう心がけていきたいと思っています。



## 人間ドック医師としての使命

亀田MTGクリニック 院長 橋本拓平

昨今の医療機器技術の進歩には目を見張るものがあります。20年以上前、自分が研修医の頃の胃カメラと比較しても、現在は膨大な量の画像データから検査医が瞬時に判断を下さねばなりません。以前にも増して人間の脳が画像処理に追いつけない状況となっています。

そのような中、経年受診者さまに対しては検査直前まで過去所見および画像を繰り返し見て、頭の中で比較しながら内視鏡検査に臨んでいます。ちょっとした画像の違いに反応すべく集中し、所見を拾い上げますが、ここで医師のセンスが問われます。あらゆる違いを異常所見としてしまえば、受診者さまを

過度に不安がらせてしまいます。ドックを受けたがために心配事が増えてしまい体調を悪くされては本末転倒です。

将来病気を引き起こすとしてもだいたい先と予想出来る所見は載せずに、メモだけ残し、次の検査に役立たせる。このようにして早期の疾患が見つかり、快復された受診者さまにお会い出来ることが何にも代えがたい喜びとなっています。

認知症への不安の声も多く頂いており、鴨川でも行われている「MRIの画像解析を活用した脳健康評価」の導入も考えています。鴨川・京橋に続き、インバウンド事業にも力を入れて参ります。





# 年男・年女 年頭所懐

令和七年

## 「新たな年に向けて」

脳神経内科 部長代理 佐藤 進

平成3年に初期研修医として亀田に入職し34年になりますが、これまで滞りなく(?)仕事をしてこられたのも、ひとえに周りの医師やメディカルなどのスタッフのお陰であり、改めてこの場をお借りして感謝申し上げます。

さて、私は趣味?として登山とランニングをしています。登山はほぼ単独なので遭難の確率を少しでも下げるため、日頃から体力維持にほぼ毎日腹筋120回、腕立て100回など継続しています。

走ることについては、毎年3月の日曜日に佐倉マラソンがあり、昨年同様5時間以内での完走を目指して10月より月・水・土曜は9km、日曜・祝日は19km走るようにしています。3月のマラソンが終わると夏山に向けて日曜・祝日に房総の山で12kg程度の荷物を背負って4時間25分のコースを3時間程度で登るトレーニングをしています。昨夏は週末の天気が不安定で満足な山行ができませんでしたが、大雪山の旭岳からトムラウシ山への縦走が心に残るものでした。今年も3月のマラソンの完走と、夏にはまた大雪山(今年度は黒岳からトムラウシ山)の縦走を目標に体力を維持していこうと考えています。

## 「一回想」

看護管理部 副部長 池田晴美

この地に生を享け60年が経つ。漁師町で育った私は、朝から鰯のたたき、さんが焼き・なめろう、鯖ハンバーグ、透明なイカの刺身を堪能、地の新鮮な魚に料理上手な母の手が加わり、ここでしか味わえない一皿に昇華。贅沢な食卓に今は亡き親への感謝の想いが募る。

看護学校に入学して間もなく、原稿執筆「学校だより」の依頼があった。「太平洋を庭と称し港で遊び育った鴨川の地が大好き、できればこの地に骨を埋めたい」と、語っていたことを思い出した。言霊のように今年、定年を亀田で迎える。これまで看護実践、看護教育、看護管理と、患者さまを含め多くの方々との出会いと支えがあり経験を積むことができた。私のライフステージは亀田と共に巡り、紛れもなく“亀田っ子”である。この地に亀田(医療機関)があったこと、感謝に堪えない。

以前とは異なり、療養の場は医療機関からあらゆる場所へ広がり、地域において療養を支える取り組みの強化が急がれており、地域における看護支援のニーズは更に高まってくるであろう。「人財」不足が深刻化し多くの課題が山積しているなかで、多様な健康課題に看護の力を発揮していくことが期待されている。この地域において質の高い医療を支えるため、次世代にバトンを繋ぎ終えたいと想う。

## 「感謝の想い」

歯科技工室 室長 鮎川敏博

早いもので私も5回目の年男を迎え、最近では皆から角が取れ、丸くなったとよく言われます。そして涙もろくなってしまいました。テレビのCMですらウルウルする始末です。19歳の頃、人生の大先輩から「年を取って丸くなることは良いことだが尖った所はそのまま、大切な物を付けて丸くするんだぞ」という言葉が私の心に刻まれています。

今の自分はどうでしょう? 角が削られているのではないのかと訝しい限りですが、少しでも大切な何かが付いていてくれると思っております。その大切な物とは人との出逢いと繋がりがだと思います。長い人生、人付き合いが面倒にすら思える時期もありましたが、

今では私の唯一の財産であることに年を重ねて気づくことができました。そんな大切な人達と、また新たな出逢いが、これからの人生に彩りを添えてくれることと思います。

感謝の想いを胸に今年も過ごしてまいります。

## 「初心を忘れずに」

経営企画部 副部長 若月 敏

この原稿依頼を機に社会人になった時のこと、亀田総合病院に転職した時のことを思い返しました。

転職は2001年で、前職はコンピュータ販売の商社でシステムエンジニアをしていました。その会社を選んだ理由の一つは、会社案内に医療システム開発とあったからです。大学は医療と関係ありませんが、就職時医療関係に興味がありました。入社後に医療システムは大阪支社と九州支店の管轄で、東京配属の私は医療関係には携われず、主に販売管理・在庫管理システムを担当しました。

2001年は子供が生まれた年でもあり、私は長男で将来的に実家(南房総市)へ戻ることを前提に転職情報を集め始めた時、ご縁があって亀田総合病院から声をかけて頂きました。予定していた転職の時期からは少し早まりましたが、元々医療関係の仕事に興味があったことを思い出し、お世話になることを決めました。その時、自分は病院で何が出来るのか、何の役に立てるのかを考えていたことを思い出します。これからは病院に貢献できるように微力ですが出来る限り頑張りたいと思います。

## 「まだまだこれからです」

生殖医療科 医長 大内久美

1回目の年女の時は山梨県の小学校を卒業して中学生になり、2回目の時は長野県の大学を卒業して研修医になりました。そこから24年、その間に鴨川市に移り住み当院での勤務も17年目になります。毎日富士山を見ながら通学していた女子高生は、今では毎日海を見ながら出勤する中年女子になりました。

私の勤務する生殖医療科は妊娠に向けてのサポートをする科で、患者さんと一緒に一喜一憂し、時にはこちらが元気をいただけるような恵まれた職場です。ただ患者さんにとっては妊娠を希望しながらそこに辿り着くまでの期間、特にその期間が長くなるほど大きなストレスのかかる時間になります。気持ちの面だけでなく通院のためのスケジュール調整や治療にかか

る経済的な負担、周囲からの悪気のないプレッシャーなどなど。当科卒業後にお手紙をくださったある患者さんは「通院中は出口の見えないトンネルの中にいるような気持ちでした」とおっしゃっていました。一緒に出口を探すことは自分の役目の1つですが、出口が見えなくて不安な時に、隣で手をつないで少しでも不安を減らせるようなお手伝いができればいいな、いつも思っています。

もう「若手」とは呼んでもらえない年頃になってきましたが、気持ちはまだピチピチですし、「伸びしろ」もまだまだありますので、仕事もプライベートも勉強もさらなるステップアップを目指して励んでいきたいと思っています。

## 「『縁』を大切に」

歯科口腔外科 部長代理 渡邊伸也

早くも4回目の年男を迎えました。年男を迎えた毎に自分史を振り返ってみると、色々な「縁」を感じて生きてきたように思います。

12歳の時に会った、小学校の担任の先生(自分の人生の礎になっています)、24歳の時に会った、歯科医師としての道標を示してくださった恩師の方々。36歳の時に当院で働かせていただくことになり、その後、妻との結婚、娘の誕生がありました。娘には縁を大切に結んでいってほしいという願いから、「結」という字を使って名付けました。

これからはどんな人生が待っているのか。あと数年で50歳を迎えますが、「五十にして天命を知る」といわれるように、自分が何のために生き、この仕事をしているのかを自らに改めて問いながら次の12年を送ってみたいです。

「縁」は巡り合わせや関わり合いという意味で表現されます。私は、縁とは偶然訪れるものではなく、これまでの行いが繋がってきた結果、自らに与えられるもの、と考えています。

次の年男を迎えた時、患者さま第一の充実した日々を送ることができたと思えるように、またそれを娘に伝えることができるように「縁」を大切に過ごしていきたいと思っています。







## 「日々是精進」

診療支援部 メディカルクラーク課 係長  
松井利江

自分が4回目の年女だということに驚きましたが、せつかなので自分自身を振り返りました。

26歳の時、皆に分け隔てなく優しい中学の同級生が、病気で亡くなりました。楽しく過ごした仲間だったので、私にとって衝撃的な出来事でした。今思うとその出来事により、何事も後悔しないよう、興味あることはやってみようという思いの始まりでした。しかし振り返ってみると、行動を先延ばしにし面倒くさがつて、時間の流れと共にやらなくなっていました。昨年は、今までの行動パターンと逆のことを選択してみようと思い立ち、やってみたら心動かされる体験がたくさんできました。歳を重ねると刺激に慣れてしまいがちですが、これからも精一杯色々なことに取り組んでいこうと思います。

仕事の面では入職したころ(15年前)とは違い、システム化が進み楽になったり覚えることに苦労したり、他部署との連携や、チームワークが必要な場面がとて多いですが、皆さんに助けられていて感謝しかありません。巳年生まれらしく何事にも粘り強く、楽しみながら取り組み、チームの方に少しでも頼っていただけるようになりたいと思います。

## 「リハビリテーション医療への思いを新たに」

亀田総合病院 リハビリテーション室 副室長  
齋藤 洋

今年、巳年の年男として48歳を迎え、また入職してから20年の節目の年となりました。

この20年間、多くの職場の仲間を支えられ、温かいご指導をいただきながら成長を続けることができました。また、当院を退職された先生方とも良いご縁が続き、共同研究を行う機会に恵まれていることにも深く感謝しています。

おかげ様で複数の多施設共同研究に取り組むことができ、その成果としていくつかの論文を発表する機会を得ました。そして2024年からは、亀田総合病院リハビリテーション室の副室長として新たな責任を担うこととなり、身の引き締まる思いです。

次の12年間は、臨床・研究・教育の3つの分野でバランスを保ちながら、常に学び、自己成長に努めていきたいと考えています。そして、自分自身の成長が病院全体の発展に寄与できるよう、質の高いリハビリテーション医療を提供し続け、患者さまの健康に貢献できるよう職場の皆様と共に尽力してまいります。

## 「成長続ける職を得て」

安房地域医療センター (出向)  
ME室 主任 石原一樹

入職当時、臨床工学技士という医療職は世間ではほとんど認知されていませんでした。院外で職業を聞かれた時に伝わらず、悔しい思いをしていました。

現在では、テレビドラマなどでまれに名前があがるようになり、多少世間に認知されてきたのかなという印象です。数年前、コロナ関連の記者会見で当時の安倍首相の「臨床工学技士への感謝の言葉」というフレーズをニュースで見たととき、「頑張ってきてよかった」と目が潤んだのを覚えています。

医療機器は日々進歩し多様化するため、我々のニーズはこれからも増加することが予想されます。施設基準に「臨床工学技士が配置されている」という項目が増えてきていますし、タスクシフト・タスクシェアリングによっても臨床工学技士の担う業務は広がりを加速させています。職務経験が増えてもなお、職務領域が広がり新しい分野に挑戦できる仕事に身を置き、充実した毎日を送っています。

この新しい業務の拡大に取り残されぬよう、まずは年男である今年1年間より一層の研鑽に励みます。

## 「10年続けていること」

薬剤室 副主任 船木麻美

早いもので入職して10年になりました。

当院に入職してから始めて今も続けていることが2つあります。一つは薬剤師、もう一つはスキューバダイビングです。

当院にはダイビングサークルがあり、先輩に誘われて同期と一緒に入りました。近隣の勝浦、館山にダイビングスポットがあるため、休日に日帰りでダイビングを楽しむことができます。海に入ると、日々の忙しさも忘れリフレッシュになります。勝浦の海は地形がダイナミックでイサキやタカベといった魚の群れやカンパチ、ツムブリ、ヒラマサ、ワラサなどおいしいような魚を間近で見られるところがお気に入りです。館山の海ではイルカ、ジンベエザメ、ドチザメ、マンボウ、アオウミガメ、人なつっこいコブダイなどアイドル級の生物たちと一緒に泳ぐことができます。そういった非日常の写真や動画を撮るようになって、どんどんダイビングにハマってしまいました。

その中でお気に入りの一枚をご覧ください。2023年2月に勝浦の鵜原沖で撮影した写真です(写真1)。ダイビングというと夏のイメージがありますが、秋～冬の方がこんなふうに透明度が良いんです。オレンジ色

の魚はキンギョハナダイという魚です。正面から見ると紫のアイシャドウがとってもかわいいです(写真2)。

30代も後半に突入し、これからもダイビング(と薬剤師)を長く続けられるよう、健康に気をつけたいと思います。



写真1

写真2

## 「立派な木こりになる事を誓います」

亀田IVFクリニック幕張 事務室 森野なつみ

2025年は木こり活動を再開する。

2024年は仕事が忙しいからと言い訳をして、木こり活動をサボり気味だった。2019年の台風15号の被害を見て、私にも何かできないのかと始めた森林ボランティア。ボランティアで始めた木こりだが、どんどん楽しくなって、自分の心の栄養補給のために森へ通うようになった。木こり活動を充実させるために亀田IVFクリニック幕張を辞め、毎週末森の中でチェーンソーの練習をしていたのに。パートとして戻ってきても、土曜日は休んでチェーンソーの技術を磨いていたのに。正社員になっても月に1度は森に行っていたのに。

最近サボりすぎではないか？ そろそろ再開しなくては、木こりができないヨボヨボのおばあちゃんになってしまう！ まずは何をしようか？ 木こり活動で仕事に支障が出ないように、体力をつけなくては。あとは知識も必要。森林・林業白書を読む習慣をつけよう！ 仕事をしながら木こりを続けるのは大変だと思うが、頑張ってみよう。そしていつか鴨川にいらっしゃる、憧れのあの方と一緒に木こりが出来る日が来ますように。川井先生、本当にありがとうございます。

今年は木こり復活の年にする！ 年末に断髪式も済ませて、準備はOK。次の休みに師匠に預けてある私の相棒、STIHL MSA220C(チェーンソー)を迎えに行こう。

## 「これまでの12年とこれから」

亀田浜荻クリニック リハビリテーション室 主任  
西山新治

鹿児島県から鴨川に移り住み、いつの間にか12年が経過していることに驚きを感じています。当初は3年ほど学んで地元に戻る予定でしたが、この地の温か

さや職場環境の良さに心惹かれ、気づけばあっという間に時が過ぎ去っていました。

これまで総合病院やクリニック、亀田ファミリークリニック館山など、さまざまな事業所で貴重な経験を積ませていただき、2021年には亀田浜荻クリニックの立ち上げにも携わることができました。こうした経験を通じて、自分自身の成長を感じています。

また、プライベートでは結婚し、3人の娘に恵まれました。さらには、東京オリンピックでメディカルボランティアとして活動する機会もいただきました。日々忙しい中でも、家族や地域、職場の皆様の温かい支えがあったおかげで、充実した日々を送ることができました。

これからも、この地域に根を張り、家族や地域、そして職場に貢献し続けながら、さらなる成長を目指していきたいと考えています。新たな挑戦や課題にも積極的に取り組み、次の12年も充実したものにしていきたいと思っています。

最後に、皆様にとって2025年が幸多き一年となりますよう、心よりお祈り申し上げます。

## 「脱皮する！」

臨床検査室 主任 長野恭之

実は12年前も同じようにこうして、年男抱負の執筆依頼を受けました。12年も経っているので、何を書いたのか全く思い出せないくらいこの12年間でたくさんの経験をさせてもらいました。

東京スカイツリーが開業した2012年に入職し、その当時同期は11人いました。1年間の初期研修プログラムを経て生理機能検査室に配属されました。配属後は心エコーや心臓カテーテルといった循環器診療に直接携わることができ、自分自身の成長のためにと学会発表や専門試験もたくさん受けました。プライベートでも結婚、子供も2人産まれ、とても充実した日々を過ごしています。

年々同期が退職し、ついに3人になってしまいました。しかし、上司や先輩方はもちろんのこと、頼りになる後輩たちにも恵まれ、部署をまとめる立場になった今、このような環境で仕事ができていることにとても感謝しています。

2025年の目標は「変化の年」です。働き方改革が進む今、今までとは違う新しいことにどんどんチャレンジし、自分自身も部署としても、みんなで成長する1年にしたいと思っています。あとはそろそろアラフォーを意識して健康にも気をつけようと思います。



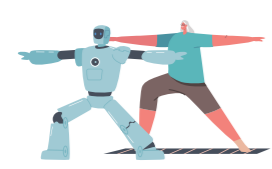


リハビリテーション事業管理部が昨年40周年を迎えました。従来のリハビリテーション(以下リハビリ)の対象者とされていた人たちの枠を越え、「亀リハ」は新たな価値や顧客の創造に挑戦しています。亀リハの魅力や展望を村永 信吾部長に聞いてきました。



2040年問題

近年注目を集める「2040年問題」。2040年には、団塊ジュニア世代(1971年～1974年生)が65歳を超え、全人口に占める65歳以上の高齢者の割合が約35%に達すると予測されています。そのような状況下においても少子化は止まらず、減る一方の若者層が、圧倒的に数に勝るお年寄りをサポートしなければならぬ社会がやってきます。医療や介護が必要な人が増える一方で、介護・医療現場で働く人手が不足し、社会全体の仕組みが維持



できなくなる可能性が指摘されています。現役世代の負担増で存続が危ぶまれるのは年金制度も同じです。

こうした問題を解決するため、AI(人工知能)やロボットの活用、定年延長や高齢者の社会参加を促す施策など、さまざまな方策が議論されています。そのような中、村永部長はリハビリを通じて社会全体の生産性を向上させることが、2040年問題の解決の糸口につながると考えています。

亀田の新しいリハビリ

リハビリの対象者といえば、「脳卒中や心筋梗塞によって身体の一部に障がいが残ってしまった人」「骨折などで歩行が困難になった人」というイメージが一般的ではないでしょうか。また、リハビリスタッフが働く場所についても、病院や介護施設に限られると考える人が多いかもしれません。

亀田メディカルセンターのリハビリテーション事業管理部には現在254名が在籍しています。スタッフの活動は多岐にわたり、従来の対象者だけにとどまらず、がん患者のようなこれまではリハビリの対象とされることが少なかった疾患を抱える患者さまにも対応しています。さらに、医療法42条で認められたメディカルフィットネス施設であるスポーツ医科学センター、認定こども園、プロスポーツ選手のグラウンド、地元の小・中・高の学校など、あらゆる領域に活動の場を広げています。



POINT 医療法42条施設(疾病予防運動施設)とは

医療法人は原則病院や診療所以外での業務を禁じていますが、医療法42条では医療法人が運営する附帯業務として「疾病予防のために有酸素運動を行わせる施設」を認めています。医療機関と密接に連携し、健康運動指導士のもと、有酸素運動や筋力トレーニングなどを提供しています。

現在亀田グループには、「亀田スポーツ医科学センター(鴨川)」と「亀田京橋スポーツ医科学センター(東京)」があります。亀田スポーツ医科学センターではいきいきと過ごしたい老若男女や、健診などで血圧が高いことや運動不足を指摘された方々が元気に汗を流しています。亀田京橋スポーツ医科学センターでは働く人の健康増進や、ゴルフのスコアを伸ばしたい方など、ビジネスパーソンにも人気なプログラムを提供しています。保険適応外の運動指導サービスを提供することで、利用者のライフステージに応じた保健・医療・福祉場面でのリハビリサービスの提供が可能となっています。



(病院は誰かの仕事でできているP22もぜひご覧ください)

支えられる人から支える人へ

リハビリの目的は、けがや病気、障がいなどによって失われた身体や心の機能を回復させ、可能な限り自立した生活を送れるよう支援することです。リハビリを通じて以前の状態に近い身体機能の回復が得られることで日常の喜びを感じるのは素晴らしいことですが、それだけで終わってしまうのはもったいないと村永部長は感じています。

例えば脳梗塞などで身体の左側(患側)にマヒが残ったとしても、「右側(健側)では何ができるだろうか」を模索し、可能性を引き出すことにあります。リハビリによる機能回復や身体の動きを工夫することで、日常生活自立はもちろんのこと、職場復帰などの社会参加への復帰も可能となり、「支えられる側」から、社会を「支える側」へと役割を転換できる可能性があります。

さらに、リハビリは「支えられる人」の介護や介助を担う側の負担も軽くする効果もあるのです。介護離職していたケースでは、患者の自立度が高まることで仕事に復帰できる可能性が生まれます。このように、リハビリは、社会を「支える人」を増やし社会全体の生産性向上や医療コストの抑制にもつながるなど、これからの社会ニーズに貢献できると考えています。

働く人を元気に

村永部長が考えるもう一つの課題は、社会を「支える側」にいる現役世代が、ドロップアウトせずに働き続けられる仕組みづくりです。

本来であれば活発に働けるはずの現役世代でも、身体の痛みやメンタルの不調により、生産性が低下してしまうことがあります。例えば、腰痛で重いものを持ってない、頭痛で仕事に集中できないといった状況は、多くの方が経験したことがあるのではないのでしょうか。このように、病欠するほどではないものの、心身の不調により十分に仕事ができない状態を「プレゼンティーズム(Presenteeism)」と呼びます。

プレゼンティーズムの代表的な例が腰痛です。腰痛は労働災害として最も多い業務上疾病の一つとされており、2020年に行われた調査では、腰痛がもたらす仕事の損失割合は3～4割にのぼると報告されています。

こうした中、企業側でも従業員の健康を経営的視点で捉える「健康経営」を意識する取り組みが広がっています。従業員が健康でしっかり働けることは、

生産性の向上だけでなく、健康保険料負担の軽減にもつながります。また、「従業員を大切にしたい会社で働きたい」と考える求職者に対する魅力的なアピールポイントにもなります。



リハビリによる健康増進や予防の取り組みは、健康経営を目指す企業にとって有効な解決策の一つです。ストレッチなどの運動指導による予防効果や、運動器の不調の早期発見を通じて、「転倒や不調を防ぐ」ことを実現できると村永部長は話します。こうした取り組みに注目する企業も多く、これを契機にオフィス街で働く人々の健康管理や維持に積極的に取り組む亀田京橋クリニックや亀田京橋スポーツ医科学センターをより多くの方に知ってもらい、積極的に活用していただきたいという思いがあるそうです。

医療とリハビリ

厚労省が提唱する地域包括ケアシステムでは、団塊の世代が75歳以上となる2025年を目途に、重度の要介護状態となっても住み慣れた地域で自分らしい暮らしを人生の最後まで続けることができるよう、住まい・医療・介護・予防・生活支援が一体的に提供される地域包括ケアシステムの構築を実現していく方針を示しています。亀田総合病院のように共通の電子カルテなどでリハビリ・医療・介護のスムーズな連携が実現できている場合はよいのですが、近年増えている自費でのリハビリ施設などの場合はこうした連携が途切れてしまうことがあります。

自費でのリハビリはリハビリ実施に際しての時間や期限の制限がないため、納得がいくまでリハビリを受けられる利点がありますが、過剰なりハビリで不必要な副作用や合併症に直面するリスクがあります。また保険診療で実施されるリハビリとは異なり、医師による医学的判断がない場合には、医学的リスクを見落とし適切なタイミングでの受診が遅れてしまうこともあります。だからこそ医療との連携が不可欠なのです。

このような事態を防ぐため、村永部長が現在目指しているのが「評価表」や「基準値」、「〇〇な状況になったら病院を受診してください」といった基準を医師と共同で策定すること、医師による潜在的な運動リスク







の有無を確認する運動可否チェックなどを事前に行うこと。さらにリハビリと医師の密な連携で信頼関係を構築し利用者が必要に応じて適切なタイミングで医療機関を受診し治療できることを目指しています。

このような基準値は、自宅で運動する方々にとっても有益な指針となります。「ここが痛くなったら受診してください」という共通認識が広がれば、症状が悪化する前(未病)に適切な治療を受ける目安となります。これにより、疾病の重症化を予防し健康寿命の延伸といった社会全体の利益につながることを期待されています。

また連携はリハビリ分野だけにとどまるわけではなくと言います。都内のデパートで開催された体力測定イベントで血圧測定を行った際、最高血圧が190mmHgを超える方がいました。本人は「自覚症状がないので大丈夫」と考えていましたが、リスクを丁寧に説明した結果、スムーズに受診につなげることが

できたこともあり、医療施設を飛び出して地域で活動し、適切な医療やリハビリの情報を普及・啓発する活動は、地域住民の疾病に対する気づきや重症化予防に重要な意義があると感じています。

### リハビリとは

村永部長は、「リハビリは身体機能の回復だけではない」と強調します。デパートには素敵な洋服が数多く並んでいます。しかし、人々が購入しているのは洋服そのものだけでなく、「この服を着て出かけた」「これを着たら素敵だろう」という期待や思いであると言います。同様に、リハビリも単に「歩けるようになる」だけでなく、「学校へ行きたい」「仲間と温泉にいきたい」といった社会活動や社会参加への期待や思いをかなえるように



「いつまでも涼として賑ふる」

## すべてのライフステージにリハビリ

### 幼少期 【お子さまとリハビリ】

発達障害について「グレーゾーン」という言葉を聞くことがあります。これは発達障害の特性はあるものの、診断基準をすべて満たしていない状態を指す言葉です。特性の重症度に関わらず、こうした特性のあるお子さまを持つご家庭では、保護者が仕事を辞めてサポートに専念するケースが少なくありません。また「この子は将来どうなってしまおうのだろう」と不安を抱え込む保護者が多いのが現状です。

こうした状況の中で、リハビリの役割としては、保護者の不安に寄り添いながら、日常についての具体的なアドバイスを行ったり、「この子にはこういう特性があるので、将来はこのような仕事が適しているかもしれません。○○なことを大切にいきましょう」といったお子さまの可能性を探したり、さらに必要なスキルの情報提供とそのスキルを身につけるためのリハビリ治療を提供します。

リハビリテーション事業管理部は、言語聴覚士を認定こども園OURSの開設当初から派遣し、しっかりと寄り添う支援体制を整えています。リハビリを通じてお子さまの可能性を広げ、保護者の不安を軽減する取り組みです。



### 小中学生 【運動部員向けメディカルチェック】

部活動の練習や試合を通じて発症しやすいスポーツ傷害の予防および早期発見を目的に、スポーツ医学科の医師を中心としたチームにより、鴨川市の教育委員会と連携し、中学校運動部員を対象に「メディカルチェック」を2009年より実施しています。問診票を活用し、種目ごとにケガをしやすい部位を中心にチェックを行い、痛みや動きに違和感が見られた生徒には超音波(エコー)装置を用いて状態を確認します。その上で、安心してスポーツに取り組めるよう、柔軟性向上を目指したストレッチ方法や予防策を指導しています。選手として長くスポーツに取り組めるよう、未来を見据えたプログラムとして注目を浴びています。

### 働く人に 【働く人をもっと元気に】

都内有数のオフィス街に位置する亀田京橋スポーツ医科学センターでは、働く人々を対象としたユニークな企画を展開しています。同じビル内の就業者を対象にした「大人のラジオ体操」や体力測定に加え、今後は災害時に迅速に避難するための「防災体力」を測定する取り組みも実施予定です。

また、亀田京橋クリニックの人間ドックを通じて運動不足や生活習慣病を指摘された方々に対し、運動指導を行うプログラムも提供しています。これにより、



取り組みたいと考えています。

同時に、リハビリは社会のBCP(事業継続計画)を支える存在でもあると言います。元気な高齢者に長く働いてもらうこと、働く人が元気に働けることは少子高齢化が進む日本では非常に大切なことです。また元気な高齢者が増えればその分、医療費の抑制や介護負担の軽減に寄与します。リハビリが個人レベルの回復を超えて、社会全体の持続性と安定性を支える基盤となってゆくのではないのでしょうか。

昨年、亀田総合病院および亀田リハビリテーション病院が人材派遣において表彰されたJRAT(Japan Disaster Rehabilitation Assistance Team: 日本災害リハビリテーション支援協会)の活動は、まさにBCPを体現したものと言えます。震災直後のケガや病気の治療とは異なり、長期にわたる避難所生活での運動不足解消や筋力低下防止に向けた活動を行うことで、被災者の生活機能を回復させるだけでな

働く人々がいつまでも健康でいきいきと活躍できるよう支援する企業にとっての信頼できる「パートナー」としての役割を果たしています。

### 【医療従事者の健康のために】

患者さまの身体を支えたり、患者さまの移動などを行う看護師・看護補助者は実は腰痛持ちが多くいます。職員の腰痛を予防するために、リハビリテーション室のメンバーのアドバイスをもとに「腰痛予防体操」を看護部で実施しています。毎朝亀田クリニックで流れるアナウンスを合図に朝礼などの合間にストレッチを行っています。

### 出産後 【女性を応援する】

出産後の女性を対象とした「産後骨盤ケア」は、消化器外科の高橋知子部長をリーダーに、リハビリスタッフが活躍する取り組みのひとつです。このプログラムでは、出産後の排尿や排便に関するトラブルの解消を目指し、医師、助産師、理学療法士がチームとして支援体制を整えています。

また、2018年からは千葉県勝浦市の委託事業として「産後ゆるやか骨盤エクササイズ」を実施しています。このプログラムは、育児に追われ、自分自身のケアを後回しにしがちな産後の女性に対し、職場などに復帰

く、社会が危機から早期に立ち直るためのまさに「社会のリハビリ」にも寄与しています。

## 2025年のリハビリテーション事業管理部

リハビリテーション事業管理部2025年のキャッチコピーは「新化と深化で進化する」。このスローガンには、新たな取り組みに挑戦すると同時に、現在取り組んでいることをさらに深く掘り下げ、より理解を高めることで、事業全体のさらなる成長を目指すという意味が込められています。

これからもより質の高いリハビリを提供し、社会に求められる存在となるためのメッセージを発信しつづけ、次の50周年に向け、「亀リハ」の挑戦はこれからも続きます。



する際の不安の軽減や生活の質(QOL)の向上を目的としています。昨年から鴨川市内でも導入しており、活動の場は広がっています。少子高齢化が進む南房総で少しでも安心して出産・子育てに向き合ってもらいたいという思いが込められています。

### 【病気になるっても】 【がんリハビリ】

現在リハビリは、がん治療においても重要な役割を担っています。がんが診断された直後からリハビリを受けことができ、手術後の後遺症の予防に加えて、体力維持や放射線治療・抗がん剤治療後の倦怠感の軽減にも効果があるとされています。

リハビリを通じて患者さまの悩みや困りごとをスタッフが聞き取る機会も多くあります。そうした声に応えたいという思いから誕生したのが、「亀田AYAサポートチーム」の活動です。医師・薬剤師・リハビリスタッフをはじめとする多職種が協力し、若年層がん患者さまが直面する様々な課題に取り組み、ひとつずつ解決を目指しています。

昨年8月に行われた「かめだキッズ探検隊」ではがん治療中の親が病院でどのように過ごしているか、がんという病気や治療について、お子さまに理解してもらえるよう担当ごとに工夫をこらした企画も開催しました。





# 看護の目

## “世界に通用する高度実践看護師を育成する” 亀田グループでの取り組み — 亀田の看護学校教育に焦点をあてて —



看護管理部 部長 渡邊八重子

2025年4月に亀田医療大学(田中美恵子学長)の大学院看護学研究科に看護学専攻博士後期課程DNP(Doctor of Nursing Practice)コースが開講します。このコースの目的は、高度な実践能力と研究能力を併せ持った看護管理者を含む高度実践者を育成することであり、修了生には博士(看護学)の学位が授与されます。国内では4番目、千葉県内では初のコースとなります。ここでは“ローカル&グローバル”、地域医療に貢献するとともに世界に通用する医療を目指して挑戦を続ける亀田総合病院と亀田の看護学校教育に焦点をあてて話をしたいと思います。

医療法人鉄蕉会のルーツは江戸時代初期の寛永末頃に遡るとされます。漢方医、蘭方医の時代を経て、明治時代の末頃には西洋医学による近代的病院としての形態が整えられました。医業を営むとともに地域の子弟教育に尽力するなど、臨床と教育を両輪として長く大切にしてきました。昭和の時代になり、1948年に亀田病院(35床)を設立。1964年に亀田総合病院(232床)と名称変更し、現在の礎がつくられました。1982年には集中治療室を新設(444床)。この頃より、海外でトレーニングを積んだ医師が採用され、世界に通用する医療を目指す病院となりました。

こうした亀田総合病院の発展を支えてきたキーマンとして、看護師をはじめとした看護

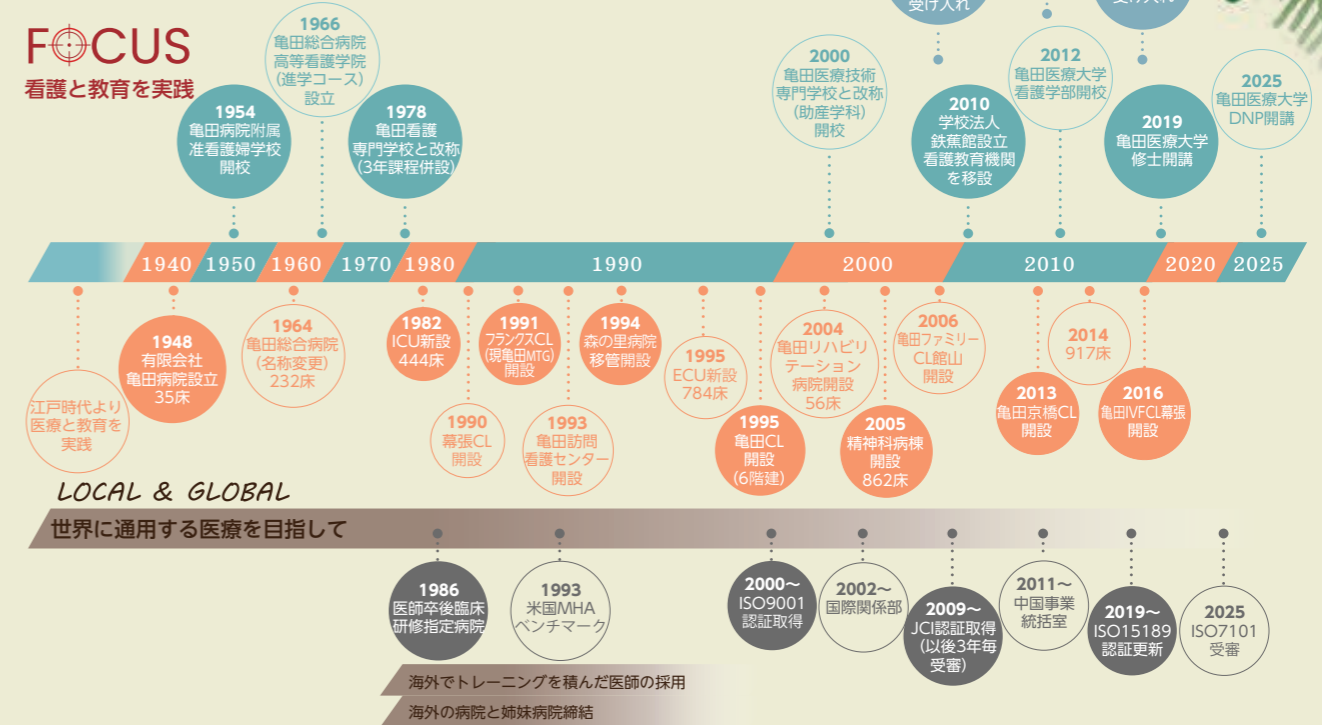
職があげられます。先代の亀田俊孝理事長は「看護職は医療の質の向上に欠くことができない」という信念のもと、優秀な看護職の育成に情熱を傾け、1954年に亀田病院附属看護婦学校を開校しました。1966年には民間ではじめての看護学校(進学コース/2年課程)を設立。1978年には、亀田看護専門学校(3年課程)へと課程を変更し専修学校の認可を受けました。2000年には助産学科を併設し、46年に渡った准看護師教育を廃止し、学校名を亀田医療技術専門学校と改称しました。

そして2010年、新たに学校法人鉄蕉館が認可され、世界に通用する高度実践看護師の育成を見据えて、2012年に念願であった亀田医療大学看護学部を開学しました。注目すべきは、初代学長を務めたクローズ幸子氏を米国から招聘し、グローバルな視野を持って活躍できる看護師を養成することを目的とした看護大学構想と世界水準のカリキュラムでした。卒業するまでに獲得すべき9つの能力は「教養教育で培う普遍的基礎能力」「質の高いケアを実践するためのリーダーシップ能力」「根拠に基づいた看護実践能力」「テクノロジーを効果的に活用する能力」「医療チームにおけるコミュニケーションとコラボレーション能力」「ヘルスプロモーションと予防に関する知識と実践能力」「国際的視野の育成と地域貢献」「生涯にわたり継続して専門性を向上させる能力」「あらゆる対象に向けた包括的な看護実践能力」とし、講義と演習及び亀田総合病院を主とした実習が展開されました。

クローズ氏のライフワークともいえるべき継続学

習の精神を引き継ぐ形で、2019年には働きながら学べる大学院(修士課程)が開講され、修了生は看護の質の向上に大きく貢献しています。そして、先のDNPコースの開講へと至ります。DNPコースの神髄ともいえるべき高度実践能力、つまり臨床現場における問題を追及し、新たな価値と変革をもたらす人材の誕生と現場に起こる化学反応を大いに期待しています。

### FOCUS 看護と教育を実践



## スタンフォード大学 いのちと死の授業

10月18日(金)午後、心理学者でマインドフルネス研究の第一人者であるスティーヴン・マーフィ重松氏を講師に招き、当院と学校法人鉄蕉館との共催で「スタンフォード大学 いのちと死の授業」と題したセミナーをKタワーホライゾンホールで開催しました。

同氏がスタンフォード大学で教鞭を執る「いのちと死」をテーマにした授業をもとに、「あなたは何に感謝していますか?」「人間は何のために生きていますか?」といった問いを参加者に投げかけ、参加者同士対話を通じて、死や人生の意味、価値を見つめ直すというプログラムの一端を体験。特に亀田医療大学からは教員の教育能力を向上させるためのFD(Faculty Development)の一環として、田中美恵子学長をはじめ多数の教員が参加し、マイ

ンドフルネスやEQ(感情知能)を活用し、学生たちが自己理解を深め、より良い生き方を見つける手助けをするプログラムについて学びました。

当院では昨年4月、亀田総合病院等臨床看護教育研究センター(渡邊八重子センター長)を設置するなど、臨床看護に関する教育、研究の促進及び発展をめざし、学校法人鉄蕉館との交流機会を増やしています。第一線の臨床と教育現場との協働により、新たな知見や学際研究に、弾みがつくことが期待されます。



参加者を前に自身の経験を語る田中 学長



# CLOSE UP NEWS

クローズアップニュース

## 血液・腫瘍内科の研究がBlood誌にダブル掲載



血液・腫瘍内科(末永孝生部長)が執筆したCase(症例報告)とBrief Report(短くまとめられた研究の報告)が、連続して2号にわたりBlood誌(インパクトファクター 22.11)に掲載されました。Blood誌はアメリカ血液学会(American Society of Hematology)が発行する、血液学分野で最も権威ある学術誌の一つで、世界中のトップクラスの研究者のみならず、医療現場や研究機関でも広く利用されています。今回掲載された内容は次の通り。

ALK-positive anaplastic large cell lymphoma, Hodgkin-like pattern with unexplained fever. (ホジキン様のパターンを示し不明熱を呈したALK陽性の未分化型大細胞リンパ腫) 田畑里佳子医師、末永孝生部長

Soluble B-cell maturation antigen levels for disease monitoring in oligo- and non-secretory multiple myeloma. (可溶性B細胞成熟抗原レベルにもとづく乏分泌型および非分泌型多発性骨髄腫の疾患モニタリング) 池田大輔医師他

血液・腫瘍内科は、白血病、悪性リンパ腫や骨髄腫治療の中心施設として大勢の患者さまの治療にあたる臨床の傍ら、大学病院にも劣らない数多くの論文を発表しています。つい先日でも東方雅典医師の論文がHaematologica誌(インパクトファクター 9.94)にアクセプトされました。注目すべきは、その「数」だけでなく、「論文のクオリティ」にも強いこだわりを持っている点で、これまで発表してきた論文はすべて、学術誌の影響力や重要度を示す指標とされている「インパクトファクター」が非常に高い雑誌が多いことが特徴です。一般的にインパクトファクターが10以上であれば、トップジャーナルとみなされますが、Blood誌のインパクトファクターは22であり、その影響力の大きさが伺えます。他の論文もインパクトファクター10前後と、高品質な学術誌へ研究を継続的に発表しています。この他にも、2024年の北米血液学会で7演題を発表し、そのうち2題が全体の10%ほどしか選ばれ

ない講演発表に選ばれるという快挙を達成。また、優秀ポスター賞を受賞するなど、数々の国際的な評価を受けています。

今回アクセプトされた“可溶性B細胞成熟抗原レベルにもとづく乏分泌型および非分泌型多発性骨髄腫の疾患モニタリング”の研究では、十数年前から患者さまの血液を長期保存し研究を進めてきた成果が実を結び、新たなマーカーの活用により、これまで見落とされがちだった疾患の早期発見が可能となります。この研究は、臨床検査室の協力がなければ成り立たなかったといえます。現在も画像診断、放射線科、病理診断など複数部署と密接に協力し、データを共有しながら研究を進めています。

「私たちの目標は、多くの患者さんに最新の医療を提供するとともに、医学の進歩に貢献する臨床研究を続けること」と末永部長。「患者さんを診察して『良かった』『悪かった』で終わらせるのではなく、診療の過程で生じる疑問や課題を解決することが大切であり、こうした研究が医学の進歩につながることに大きな意義がある」と語ります。

例えば、血管内リンパ腫のランダムスキンバイオプシーは現在日本の診断のスタンダードとなっていますが、この方法は約10数年前、亀田での研究成果としてメイヨークリニックプロシーディング(インパクトファクター 7.62)に発表されたものです。「田舎の病院が診療のスタンダードを生み出した、と驚かれることもある」と末永部長は笑います。しかし、こうした成果を支える財政的課題については頭を悩ませています。近年、物価の高騰や円安の影響もあり論文の掲載費用も増大し、多くの論文を発表するには資金のやりくりが容易ではありません。それでも、病院からのバックアップを期待しつつ、「患者さん一人ひとりの症例を大切にしながら、通常の医療実践を変えるような研究を続けていきたい」と強い意欲を示しています。

血液・腫瘍内科の詳しい業績については、QRコードからぜひご覧ください。



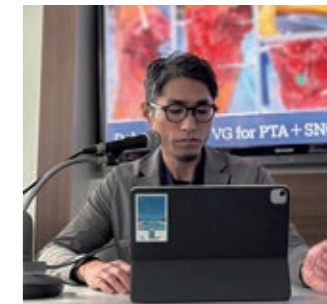
## 整形外科 久能医師が受賞

10月5日(土)~8日(火)、タイ王国の首都バンコクにある国立シリラート病院にて「ASAN-SIRIRAJ reconstruction of lower extremity workshop 2024」が開催されました。下肢再建のスペシャリストから直に学べるプログラムで、当院から整形外科 部長代理/上肢外科・外傷再建センター長の久能隼人医師が参加。「動脈損傷を伴う下腿重度開放骨折の救済」について症例報告を行い、「Best Case Award」を受賞しました。

久能医師は、「今回世界的に著名な先生方から直に治療体系を学ぶことができる絶好の機会をいただき、workshopに参加してきました。幸運にも私が実際に行った治療に関してご評価をいただきAwardを受賞することができました。これは下肢の重症な外傷で他院では治療不可能とされたものを治療、日常生活に復帰させることができ

た症例でした。今まで学んだ知識や技術を集約し、更なる医療レベルの向上に貢献できれば幸いです」と喜びのコメントを寄せてくれました。

また11月28日(木)に行われた日本マイクロサージャリー学会会員総会では、久能医師が同学会が発行する『日本マイクロサージャリー学会会誌 第37巻第1号』で最優秀論文賞を受賞した論文「大腿骨内側上顆および内側滑車からの血管柄付き骨軟骨移植における挙上時の要点と栄養血管の解剖学的検討」が年間最優秀論文賞を受賞し、表彰式が行われました。



## 第12回房総がんケアフォーラム開催

11月2日(土)午後、5年ぶりとなる「房総がんケアフォーラム」がKタワーホライズンホールにて開催されました。院内外から約100名が参加し、誰もがいざれ向き合う「老い」や「看取り」、「死」について考えました。

厚生労働省から地域がん診療連携拠点病院の指定を受ける当院は、安房医療圏のがん医療の中心的な役割を担っており、がん医療の充実をめざし、2008年から同フォーラムを開催してきました。第12回目となる今回は、仙台にて長年在宅緩和ケアに携わってこられた山室誠先生を迎え、「看取る人の納得と逝く人の覚悟」というテーマでご講演いただきました。

山室先生によれば、「多くの人が家族に迷惑はかけたくないと、亡くなる直前まで病まず、寝つ

かず、いわゆる『ピンピンコロリ(PPK)』を希望しているが、実際は80%の人が70代後半から何らかの介助が必要になる」と指摘。日頃の暮らしのなかで対応すべき、「老い」や「看取り」、「死」について、自身の経験や臨床経験の中で出会った患者さまのエピソードなどを交え、ユーモアたっぷりに語られました。

講演の最後に山室先生は、1970年代頃から現れた日本特有の介護を迷惑をかけることと捉える風潮に対して、「人間とは他人の世話にならずには生きられない生物種。迷惑をかけないよりも、かけ上手になりましょう」と呼びかけ、元気うちに誰かのために時間を使う『恩送り』のすすめと、最期の時に向けては望む治療などを記した「申し送り書(事前指示書)」の作成など、家族で終末期について話し合う「ACP(人生会議)」の重要性を訴え、盛会のうちに終了しました。





## 第13回地域医療連携交流会を開催

9月20日(金)午後6時から、恒例の「地域医療連携交流会」がKタワーホライゾンホールにて開催されました。院内外から約80名の医療従事者が集まり、摂食嚥下をテーマに「食べることを支える各施設の取り組みについて理解を深めました。

2010年にがん診療連携パス交流会として始まった地域医療連携交流会も今回で13回目を迎えました。この間、安房医療圏の高齢化率は上昇を続け、2023年4月現在43%となっています。加齢や脳血管疾患の後遺症により、食べ物を飲み込む力が低下すると、日常的に誤嚥を繰り返し、時に命にかかわる誤嚥性肺炎に発展したり、食べられる量が減ることで低栄養や脱水、全身の筋肉量の低下を招くことが知られています。そのため、高齢患者が良好なQOL(生活の質)を維持するためには、「食べることを支える取り組みが欠かせません。そこで今回は、「地域でつなぐ摂食嚥下～食べる喜び～」をテーマに、地域の医療機関から3施設の取り組みをご紹介します。

はじめに登壇した佐々木歯科・口腔顎顔面ケアクリニック(館山市)の福澤幸子先生は、歯科医師の立場から「食べるを支える歯科」と題して講演。口腔内環境を整え、咬合の維持・回復、摂食・嚥下機能の評価紹介することが大切だとし、同クリニックが実施している訪問歯科診療の取り組みを紹介。患者さまの多様な価値観にあわせて歯科治療・嚥下治療を計画すること、口腔内環境を整え咬合の維持・回復、摂食・嚥下機能の評価紹介することの重要性を訴えました。

続いて、小林病院(館山市)の鈴木和歌子先生は、「お口から食べる楽しみを」と題して、慢性期医療を担う病院としてのかかわりについて、言語聴覚



士の立場から講演。在宅復帰をめざし治療やりハビリを継続して行う慢性期医療の現場には、急性期の治療を終えた経鼻経管栄養や中心静脈栄養など、経口摂取ができない状態の患者が多く転入院してくると言います。実際に経験した事例をもとに、それぞれの病状や生活の様子、嚥下の状況などに応じたかかわりやその後の経過についてご紹介いただきました。

最後に、安房地域医療センター(館山市)の根本達也先生は「急性期病院の摂食嚥下障害について」と題して言語聴覚士の立場から講演。「誤嚥性肺炎や栄養不良を予防するため、急性期での迅速な対応が必要だ」とし、窒息対策ワーキングや誤嚥性肺炎対策プロジェクトを立ち上げて、週1回嚥下回診を実施するなど、多職種が連携して患者の安全な食事摂取をサポートする取り組みなどを紹介いただきました。同院では退院後も訪問リハや地域勉強会を定期開催するなど地域連携を強化しているといい、「地域全体でのサポート体制をさらに強化し、患者さまが食べる喜びを感じられる生活をめざしたい」と今後の展望についても語りました。

講演に続いて交流会も行われ、和気あいあいと歓談を楽しみながら参加者同士親睦を深めるなど、盛会のうちに終了しました。

## 「世界糖尿病デー」イベント

11月14日(木)亀田クリニック1階ロビーにて「世界糖尿病デー」イベントが開催されました。血糖値測定や



専門家によるミニ講義に多くの方が参加しました。

来院のつ

いでに血糖値を測定する方も多く、測定を受けた方々からは、日々の健康管理への意識がさらに高まったという声が聞かれました。

また、糖尿病治療にあたる各専門職(医師・薬剤師・臨床検査技師・管理栄養士・運動指導士・歯科衛生士・糖尿病支援担当看護師)によるミニ講義も好評で、講義後には、参加者が医師に質問したり、メモをとる姿も見られ、関心の高さがうかがえました。

## 虐待問題を考える FAST 教育講演会開催

『育てられない母親たち』『「鬼畜」の家 わが子を殺す親たち』など、実際に起きた事件を丁寧に取材し、繰り返される虐待死問題の背景に迫った著書で知られるノンフィクション作家の石井光太氏を講師に迎え、10月17日(木)夕方、ファミリーサポートチーム(以下FAST<sup>®</sup>)主催の教育講演会がKタワーホライゾンホールで開催されました。

厚生労働省の発表によれば、2022年度に児童相談所が対応したこどもの虐待に関する相談は21万4,800件にのぼり、虐待をした人の内訳は実母が48%、実父が42.6%、実父以外の父親が5.1%でした。また、こども家庭庁の専門委員会の報告書によれば、虐待で死亡した可能性が高い18歳未満のこどもは全国で72人(2022年度)を数え、そのうち無理心中を除いた虐待死では被害者の4割超が0歳児だったといます。

講演は、「虐待親の取材を通じて見えること」というテーマのもと、経緯の異なる4つの事件[ネグレクト(育児放棄)、心中、幼児殺し、身体的虐待]を例に、加害者となった虐待親自身がどのような  
 育成環境で育ったのか、その人となりなど、本人や家族、周辺の人物などに取材した中から見えてきた事件の背景が語られました。



## プロバスケットボール選手来院！「ハラの輪」

10月14日(月)、千葉ジェッツの原修太選手をお迎えし、「ハラの輪」の活動の一環として「IBD(潰瘍性大腸炎・クローン病)・IBS(過敏性腸症候群)の講演会・勉強会」を開催しました。「ハラの輪」は、潰瘍性大腸炎という難病に向き合う原選手が、同じ病気を抱える子や長期療養する子ども達へ夢や希望を届けるプロジェクトで、社会貢献活動を積極的に行っています。2023年には、当院の小児病棟へミニゴールポストとボールセットを寄贈していただきました。

今回の講演会・勉強会は、消化器内科の船登智将医師が司会を務め、南房総地域でIBD・IBSを持つ30歳以下の20名の皆さんが参加しました。

原選手は講演の中で、診断後にチームメンバーへ病名を伝えるまでの葛藤や不安、病気との向き合い方を語り、「自分を大切にしてほしい」とメッセージを送りました。参加者は真剣な表情で耳を傾け、時折うなずく姿も見られました。

続いて、仲地健一郎消化器内科部長が病気につ

石井氏によれば、虐待親本人に話を聞くと、皆様に「こどもを愛していた」と語り、(客観的にはネグレクトと思われる行動も)彼らなりのやり方で育児をして、こどもを育てようと本気で思っていたのだといます。また、取材した虐待親に共通する特徴として、都合の悪いことから目をそらす習慣、共感性の欠如からくる自己中心性、愛と子育ての概念の違いを挙げ、「彼らが『間違った愛情』を持ってしまった原因は、多くの場合その成育歴にある」と指摘。虐待親の両親、祖父母と3代の成育歴を調べてみると、虐待親自身も複雑な家庭環境のなかで育ち、周囲からの支援を受けにくい孤立した人間関係や環境のなかで生きてきたことが分かるとし、虐待児童だけでなく虐待親へのサポートの必要性についても語りました。

講演会には院内から医師や看護師、セラピスト、ソーシャルワーカーなど多職種が集まったほか、院外からも看護教員や保育士、行政関係者などが聴講に訪れ、児童虐待事案を早期に発見し、必要なサポートにつなげるために何ができるのか、それぞれの立場からともに考えました。

※FAST: こども虐待に対応する院内の多職種チーム。児童相談所や市町村と協働して地域のこどもたちを虐待から守る活動を行っている。

いて講演し、診断から治療までを分かりやすく解説しました。保護者たちもメモを取りながら熱心に聴講しました。

後半のワークショップでは、当院消化器内科と小児科の医師たちがファシリテーターとしてサポートし、参加者たちはチームごとに「同じ症状で悩む子にどんな声かけをすればよいか」というテーマで発表資料をまとめました。初めは緊張していた参加者も、体験談を共有する中で徐々に打ち解け、各チームを回ってアドバイスをを行う原選手とも楽しそうに会話する姿が見られました。

最後の記念撮影と交流会では、参加者たちにリラックスした笑顔が広がり、「同じ病気の仲間が身近にいると知ることができ安心した」「憧れの原選手と話せて元気をもらえた」といった感想が寄せられました。



左: 船登医師 右: 原選手



# 病院は誰かの仕事でできている



写真右 健康イベントで運動指導  
写真左 アスリート指導の様子

## 人生100年時代を支える「健幸」

2006年の開設以来、活動の場は院内にとどまらずスポーツ傷害予防を目的とした地域の中学生へのメディカルチェック事業やロコモ予防のための啓発イベントへの参加、提携するパークウェルステイト鴨川でのウェルネスプログラムの提供など、楽しく体を動かす習慣をつけることの大切さを伝えています。

村永信吾センター長

メディカルフィットネス施設として、スポーツ科学や体育学を学んだ運動指導専門スタッフが利用者それぞれのライフスタイルや目的に応じて、健康増進をはじめ、高齢者の転倒予防、生活習慣病の予防、競技復帰・職業復帰へのサポート、パフォーマンス向上など、スポーツ医学的根拠に基づき安全で効果的な運動指導を提供しています。

さまざまなトレーニング器具が揃うメインフロアやエアロバイクエリアをはじめ、陸上競技のタータトラック、投球練習場、スタジオも完備。小学生から98歳まで、スポーツを楽しむ方からトップアスリートまで、1日50~60人が利用しています。

## 今回の部署 亀田スポーツ 医科学 センター



## 「やりがい」「心がけていること」

### お仕事のやりがいは?

競技復帰やパフォーマンス向上をめざすアスリートがトレーニングする隣で、70代・80代の利用者が転倒予防のための運動に取り組んでいる…そんな「ごちゃまぜ感」が当センターの最大の特徴です。他職種と意見交換しながら知識を深め、運動指導に活かしていくことができます。



利用者同士、定期的に通ううちに自然と打ち解けて、一緒にお花見へ出かけるなど、プライベートでの交流も生まれているようです。お互いを思いやり、イキイキと交流されている様子が、単に運動療法を提供する場だけではない、人々が集うコミュニティとしての役割も果たしているのだと感じます。

「以前は草刈りが体力的にきつかったけれど、最近はトレーニングのお陰で作業が楽に行えるようになったよ!」など、運動の効果を利用者が実感し、楽しみながら体を動かしている姿を見ると、やりがいを感じます。

### 業務で心がけていることは?

体のコンディションを整えるために「なぜ、自分にこのエクササイズが必要なのか」利用者自身が運動の目的をしっかりと理解して、安全に取り組めるよう指導しています。そうすることで、たとえば災害等で日常が途切れ、当センターへ通えない状況が発生しても、自分で運動を継続することができるからです。

どんなことでも気軽に相談してもらえよう、利用者とのコミュニケーションを大切にしています。先日「孫と一緒に走れた!」と嬉しそうに語る利用者の方がいましたが、機能評価の結果をベースにその方のライフスタイルにあわせた要素を会話の中から引き出していきます。

臨床だけでなく大学や研究機関との共同研究や論文執筆など学術活動も大切にしています。また、スタッフの基本スキルの標準化をめざし、大学から実習生の受け入れを行うなど、後進の育成にも力を注いでいます。

## 健康運動指導士に聞きました!

### 健康寿命を延ばす生活習慣

寒いからといって、一日中、こたつでテレビを見て過ごしていませんか? 喫煙や肥満と同様に、「座りすぎ」は健康へ悪影響をもたらすことが知られています。また、長時間のテレビ視聴による座りすぎは、認知機能の低下と関連することも報告されています。



### こまめに動く習慣を

座っている間は、全身の筋肉の60%を占める下肢の筋肉がほとんど活動しない状態になります。「運動は苦手」「時間がない」という方は、日常生活動作でカロリーを消費しましょう。座っているよりは立っている、立っているよりは歩く、また姿勢よく座っているだけでもエネルギー消費を増やすことができます。座っている時間が長い方は30分に1回立ち上がるなど、こまめに動く習慣をつけましょう。

#### 日常生活活動を増やす一例

- 歩く時は大股を意識する
- 階段を使う
- 犬の散歩はプラス10分
- 駐車場は今までより遠くに停める



(注意) 膝など体に痛みがある方は無理のない範囲で行ってください



施設にはさまざまなトレーニング器具がそろそろ



## スタッフのよこが

### 宮本瑠美さん (写真: 左)

- 専門領域(得意領域):**健康増進 / 転倒予防 / 生活習慣病運動療法(糖尿病、維持期、心臓リハビリなど)
- 専門競技(運動指導者として):**陸上競技短距離、漕艇、セーリング、ウィンタースポーツ
- 資格:**スポーツ科学(博士)、日本スポーツ協会公認アスレティックトレーナー、健康運動指導士、心臓リハビリテーション指導士ほか

#### 取材メモ

根っからの研究者肌で多趣味な宮本さん。NHK「ファミリーヒストリー」をきっかけに、自身でも家系図づくりをはじめ早10年。宮本家は1500年代まで遡ることができたといい、江戸時代には「札差」と呼ばれる金融商人だったのだとか。戊辰戦争後、一族は利尻に逃げ延びたそうで、次の休暇を利用して101歳になるとこ大叔母(祖父(母)のいとこ)が住む北海道利尻ヘフィールドワークの旅に出かける予定なのだとか。



### 大澤有美子さん (写真: 中央)

- 専門領域(得意領域):**スポーツコンディショニング(予防・パフォーマンスアップ)、テーピング
- 専門競技(運動指導者として):**ランニング / マラソン、バスケット、サッカー、サーフィン
- 資格:**スポーツ医科学(修士)、NATA公認アスレティックトレーナー(米国国家資格)、健康運動指導士、IOC Diploma in Sports Physical Therapiesほか

#### 取材メモ

体育教師をめざし、根性論だけではなくスポーツサイエンスに基づいた指導ができるようになるうと米国の大学院へ。そこでアスリートを心身両面から支えるアスレティックトレーナー(AT)という職種と出会い、州立大学の常勤ATとして現場でのキャリアを重ねたのちに帰国。今までの経験と知識を活かし、一般の方にも広く届けたいと縁あって亀田へ。東京五輪でも現場でサポートに入る予定だったが、感染拡大で見送る判断に。



### 中嶋めぐみさん (写真: 右)

- 専門領域(得意領域):**高齢者健康増進、エアロビクス
- 専門競技(運動指導者として):**水泳
- 資格:**健康運動指導士ほか



#### 取材メモ

「実はランニングは苦手。走るくらいなら車を運転してでもプールに行って泳ぐ方がいい」と語る中嶋さん。一度は「もう絶対に水泳はやらない」と、泳ぐことから遠ざかっていた時期もあったが、60代・70代のマスターズの水泳指導をされている方との交流をきっかけに、「わたしもなにか役に立ちたい」と、泳ぐことを再開。最近では、パークウェルステイト鴨川でアクアプログラムの指導をするなど、がっつり水泳と関わる日々を送っている





# 亀田総合病院報

No.283

亀田ホームページ <https://www.kameda.com>

2025年1月1日発行（隔月発行） 発行責任者：亀田隆明 編集：広報企画室

発行：医療法人鉄蕉会 〒296-8602 千葉県鴨川市栗町1929

当広報誌は個人情報保護のもと本人の了承を得て作成しており、本用途以外の転用は固くお断りしております。

All articles on this PR magazine has been printed under the permission of the subscriber to protect their personal information.

All editorial content and graphics may not be copied without the permission of Kameda Medical Center, Public Relations which reserves all rights.

